



講演抄録

不登校・ひきこもり

親が越える5つの関門

社会福祉士・精神保健福祉士 野村俊幸

親としてふっ切れたのは……

高校へのこだわりを捨てたから

5月29日、千葉県浦安市で行なわれた講演会「不登校・ひきこもり親が越える5つの関門」(主催:親の会「Bababab」)の抄録を掲載する。講師を務めた野村俊幸さんは、不登校の子を持つ父としての経験を語るとともに、自身の経験を社会福祉の視点から読み解いた。

本日は、不登校した2人の娘の父、そしてソーシャルワーカーという2つの視点から、「不登校・ひきこもりの親が越える5つの関門」というテーマに沿ってお話しします。

現在、42歳になる長女が学校に行かなくなったのは、中学2年生でした。登校

なっていたんですね。中学3年生に上がると、完全に学校に行けなくなりまして。それどころか、昼夜逆転するし、部屋は荒れ放題。しまいは家からほとんど出られなくなりました。

長女のためによかれと思って

そうしたなか、私は決定的なまちがいをしてしまいました。中学3年生の長女を留年させることにしたのです。高校に行けなければ困るとの思いから、もう1年間中学校に残り、翌年の高校受験に備えたほうがよいだろうと考えたわけですね。親のよかれだったわけですが、これが決定的に長女を追いつめることになってしまったのです。

自分たちのやり方はまちがっていたんじゃないか。最初に気づいたのは妻でした。はじめのうちは私もこんななんじゃ世の中で通用しないぞ」と思い込んでいたものですが、自らのあやまちを受け入れるには時間がかかりました。

親としてふっ切れた最大の決め手は、「高校進学へのこだわりを捨てたこと」だったように思います。高校に行かなければこの子の人生はダメになってしまおう」という親の思いをいったん脇に置いてみると、少しずつですが「元気で生きていければいいかな」と思えるようになったんです。すると、肩の力がふっと抜けるというか、軽くなるような気がしました。長女もそれを感ずったんだと思います。向こうから話しかけてくれるようになったんです。

不登校・ひきこもり 親が越える5つの関門

- 【第1関門】 受容の入り口に立つこと
- 【第2関門】 焦る気持ちを抑えること
- 【第3関門】 心のざわつきをコントロールすること
- 【第4関門】 子どもの進み道は一人ひとりちがうことを受け入れること
- 【第5関門】 子どもの人生は子どものものと腹をくくこと

そんな長女の本音を聞いたのも、今から10年ほど前のことなんです。わが子のことはけっくわかっていて、気がついたんです。多量に思っていたけど、あらためて思い知りました。

次女も小学4年生で不登校になり、中学も行きませんでした。姉と同じ高校に進学し、公務員になりました。昨年5月に3人目が産まれ、孫が6人になりました。「孫という名の宝物」なんて死んでも歌うものかと思っていきましたが、今ではついマイクに手が伸びてしまっています。長女にも私のように怒られっぱなしなんです(笑)。

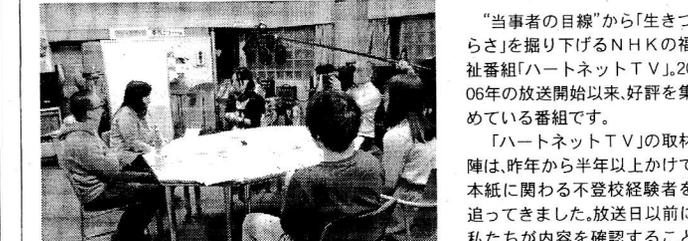
ここで話が終わってしまおうと、たまたまわが家はよかったですねということになってしまいましたが、そうじゃないんです。じつは、親としての私の対応の良し悪し

は、ソーシャルワーカーの理論で説明できるんです。もちろん、不登校は一人ひとり、原因も状況も経過もちがいますが、マニュアルの親の対応は禁物です。親が越えなければいけない関門は5つあり、そこには共通するプロセスがあります。それは私に考えています。それについて、アメリカの社会福祉臨床家のバイステックが提唱した「ゲースワイクの7つの原則」(1997年)としてわが家の体験談を事例として絡めながらお話ししたいと思います。

第1関門は「受容の入り口に立てるか」ということ。わが子が学校に行かなくなったとき、親は驚き、怒り、悲しくもなる。つまり、わが子に対して否定的な感情が渦巻きます。そうした親の変化は子どもも敏感に感じ取ります。親子関係がこうした混乱状態にある場合、子どもの状態はますます悪くなりません。そこで「休もう」と言えるかどうか。これが最初の関門です。

【プロフィール】
野村俊幸(のむら・としゆき)
1950年生まれ。精神保健福祉士、社会福祉士。現在、西野学園臨床福祉専門学校非常勤講師、一般財団法人北海道国際交流センター相談支援員など務める。おもな著書に『カナリアたちの警鐘〜不登校・ひきこもり、いじめ・体罰へはどのように対処したらよいか』(文芸社)など。

NHK福祉番組 「ハートネットTV」に『不登校新聞』登場予定



生きづらさの理由が “ちょっぴり” わかります

つながる「ひろがる」フェミ・ジャーナル
WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL femin

ふえみん

ジェンダーの視点で、平和・人権・環境のニュースをお届けします。

タブロイド判8ページ
毎月5・15・25日発行 3・8・12月の25日号は休刊

最近の主な記事:
1面インタビュー:
「東国子女 転がる石という生き方」著者 片岡啓子さん(3月5日号)
被災地の保健婦活動を記録する 菊地順子さん(3月15日号)
【新年号】たかたろ〜ちから おしどりマコ・ケンインインタビューほか
慶良間諸島寄稿 沖崎、海兵隊の実態(3月5日号)
突きつける人々〜原発事故裁判のいま〜(3月15日号)
ルガ 震災から3年〜宮城・巨大防潮堤の現場を訪ねて(4月5日号)
生きづらさを抱える若い単身女性支援(4月5日号)

ウェブショップ
http://femima.com/